

(「の」の話)



本当のお金持ちの（あるいはその気質の）奥さまは、

「いえいえ、見かけほどではございませんのよ。あるんだかないんだか、よく分かりませんの。せっかくおたずね頂いたのに、ごめんなさいね。ちゃんとしたお答えをして差し上げられなくて」

これに対して、偽物とまではいかななくても、あまり本当のお金持ちではない奥さまは、

「えっと、ルイヴィトンとエルメスとブルガリ。車はBMWですわ。ま、たいしたもんじゃないんですけどね、おほほ」

ところが、税務署職員が「おたずねしたいことが」とやってくると、

「え？何にももってません。え？車はスズキだったかしら。宅は貧乏ですから、ほんとに」一方、本当のお金持ちの奥さまの対応は、

「よく存じませんの。あまり興味がないものですから。でも色は白で、四人乗りですわ。あ！そう言えば確か、主人が日本の車ではないとか申ししていたような記憶が。これでお分かりになりますかしら？」

ホンモノは全然違うのでした。

と言うようなお話を誰かにしてみたいなと思ったのですが、無論架空の話です。

実は、どうしても「そうなんですの」の「の」を使ってみたくて思いついたお話でした。

「の」って何？それがどうかしたの？だと思います。

それでは少しそのことについてお話をさせていただきます。

恐らく小学校の高学年の時だったと思うのですが、当時日曜日の朝九時から、東京地区で言うところの6チャンネルで「兼高かおる、世界の旅」という番組をやっていました。僕はそれを見るのが大好きだったので。

バックに流れる海外の映像を、画面には映らない芥川隆行が質問し、兼高かおるがそれに答える形で、各地の映像とそれにまつわる話をする仕立てになっていました。

その時、芥川の質問に答える兼高かおるの言葉が

「そうなんですの」

だったのです。

母親も、親戚のおばさんも、近所のお母さん方も、学校の女の先生も使っているのを聞いたことがない初めての言葉「そうなんですの」の「の」

この「の」には参りました。何かよくは分かりませんでした。今までに感じたことのない、はじめて味わうところのざわつきを覚えたのです。

兼高は多分外交官の娘か何かで、恐らくハーフだったと思います。バイリンガルどころではなく、マルチリンガルで、その多国語を駆使して世界数十カ国を毎週旅するのです。

再び同じ言葉を使わせて頂くと、まさに今で言うところのキャリアウーマンの走りでした。通常それほど外国語が堪能だと、逆に日本語の方が怪しくなるものですが、兼高は、今思えば、日本でも最も美しい日本語を話していたような気がします。

しかも、まるで、先ほど架空のお話の中で登場させた大金持ちで、幾分おっとりが過ぎる奥さまのように、上品で優雅だったのです。

これには、まだ小学生だったとはいえ、脳神経の中枢部分をピンセットでつまんで、びーんとはじかれたような快感とも興奮とも言えない衝撃を受けました。

兼高の容姿は、ハーフらしく、美ボディで、目鼻立ちもくっきりし、色が浅黒いので、かなりエキゾチックでした。しかし、その容姿よりも、はるかに言葉の方に言いしれぬときめきを感じたのです。たった一文字の「の」に。

ところが、これには続きのお話があります。

当時、とにかく英才教育、英才教育で凝り固まっていた親父は、僕を放課後、英会話教室に通わせることにしたのです。

場所は近所の民家の和室で、一回一時間、マンツーマンで、一日三組までだったと思います。ところが、そこに先生として現れたのが、兼高かおるそっくりの女先生でした。何でも教室に使っている民家の方の姪御さんで、カレッジ卒業までアメリカのさる都市で暮らし、ネイティブそのものの英語を話す帰国子女と言う触れ込みで、授業のある日だけ、生徒を教えに、どこからか通ってこられるのです。

とにかく、真っ赤な口紅と真っ赤なマニキュア。紙は天然パーマで、兼高よりはかなり色白。もちろん眉目秀丽。一度見たら忘れられないルックスです。

僕は度肝を抜かれました。小学生のくせに下半身が硬直して仕舞いもしました。もう頭に血が上って、授業どころではありません。

普通こうなると、先生に気に入られようと必死に英語を勉強したりもするのですが、何故か僕はそれをせずに、先生から注意ばかりを受けていました。

あるとき、

「教える、の過去形はなんでしたかしら？」

と聞かれて

「tached」

と答えると

「ほんとうですか？それ」

答えられませんでした。taught が正解だったのです。

「どうしてなかなか覚えられないのかしら。わたくしのことがお嫌い？」

内心は「と、と、とんでもない！！逆です」でした。

「じゃあ、僕は先生が嫌いですって英語でおっしゃってみてくださる？」

それで僕は、アイ ヘイト ア ティーチャー (I hate a teacher) と言うところを間違って、アイ エイト ア ティーチャー (I ate a teacher) と言ってしまったのです。つまり訳すると「僕は先生を食べた」と。

これには先生もいささか驚かれたようで、

「あら、あなたは、わたくしをお食べになったの？」

と言われて間違いに気づき、熟したトマトやイチゴよりもっと赤くなってしまいました。

食べるには先生のおっぱいやおしりに大口を開け、丸抱えにして武者ぶりつかなくては食べられないことに思い当たったからです。

それ以降、僕は塾には行かなくなりました。とても行けそうもなかったのです。恥ずかしくて。

確かに、この先生の「の」の使い方は、兼高かおるの「の」とは異なった用法でしたが、そんな差を度外視して、僕の耳にはおなじ「の」として今でも残っています。

兼高かおるといい、この女先生といい、海外生活が相当に長く、英語が殆ど母国語のようになっている中で、一体どうしてずっと日本に住んでいる自分たちより上品で美しい日本語を話したのか、話せたのか？それが今でも不思議でなりません。

「一体どこをどうすると、あのようなことが起きるのか？」

それにしても、たったひとつの「の」の使い方だけで、これほど印象や品格が変わるとは。

「そうなんです」と「そうなんですの」の信じがたいほどの目の前に現れ、自分を取り囲んだ、空気、雰囲気、世界の差。それまで見聞きしたことのない世界で、こういった言葉を自然に使いこなして暮らすひとがいる。大変な驚きでした。

そんなわけで、冒頭の架空のお話を作ってみたわけです。